

2020年7月19日

「主イエスと共に生きる」

フィリピの信徒への手紙 3章5～9節

鈴木利子神学生

わたしは、愛知県半田市の田舎で育ちました。両親ともノンクリスチャンであり、子供の頃教会学校で基督教に出会いました。その町の学校を卒業し、特別な教育は受けていませんし、何の経歴を持っていません。

この手紙にはパウロの経歴が自分の手によって書かれています。ユダヤの人々には悲しい歴史があります。バビロン捕囚によりイスラエルを追われた多くの人々を祖先に持ち、その地においてユダヤ人の誇りを忘れずに、自分たちの生活を立てていた人がいました。パウロもその一人であり、生まれて8日目に割礼を受けたと書かれています。

「割礼」とはユダヤの人々が、神との約束の印で、神の民であり選ばれた民族であることを言い表すことです。パウロは自分がユダヤ人であることに誇りを持ち、パリサイ的な教育を学び、他の人と比べられないほど、律法に忠実に生きていました。律法を守ることが「神」に対しての正しさを表していると考え、イエス・キリストを信じる人々を迫害していました。そのパウロが、イエス・キリストによって回心に導かれた。使徒言行録に記されています。突然の光によって倒され目が見えなくされた。パウロは初めて他の人に助けられることになったのです。それまで自分で考え行動し、自分が正しいと思って生きてきた彼が初めて人を信じる事が出来た。人を信じなければ、一歩も前に進むことができない。

パウロにとってどんな恐怖だったのでしょうか。人間は一人では何もできない事を、身を以て知らされたのです。そして主イエスの弟子によって、目が見えるようにされたのです。

この時にパウロの心に変化が起きたと思います。主イエスに話しかけられ、今までのパウロの心のドアが開けられ、主を信じる心が与えられた。パウロはこの経験を通して主イエスを信じて生きる事が、今まで自分が持っていたすべてのもの、プライド、経歴などを捨て去っても自分の心に今までにない喜び、心の平安が与えられたのでしょうか。主から声を掛けられるとは、自分の心を変えるとなる素晴らしい出来事、人間にはできない事です。

パウロは、律法を守ることが神への義（正しさ）を求める事ではなく、イエス・キリストを信じる事で得られる義（正しさ）のあることを知りそれを人々に伝えていったのです。

主がパウロに与えた愛はどこからのものなのでしょう。主が向かった十字架はパウロだけではなく、私たちにも与えられた究極な愛、無償の愛です。何ものにも代えることのできない愛です。私たちはパウロの様な劇的な出来事無くても、バプテスマを受けようとする事は、主によって心を変えられた出来事に思います。パウロがフィリピの人々に送った手紙も主イエスを信じて生きる事の大切さを書いています。主からの愛が与えられている私たちです。信じて、祈り、感謝することは私たちにもできます。主と共に歩きましょう。

(文 鈴木利子)

